

国語

学校生活をゲーム化 ―学校生活をゲームとしてデザインさせる―

森本 裕大

本研究を行おうと思った動機は、保護者からよく聞く「勉強しないでゲームしなさい」という言葉からである。ゲームを好きな子どもたちが勉強を嫌がることを踏まえ、ゲームを教育と組み合わせることで子どもたちがゲーム感覚で勉強に取り組めるようにしたいと考えた。また、文部科学省とベネッセの調査によると、不登校児童の増加や学習意欲の低下が増加していることがわかった。これらの問題に対してもゲーミフィケーションを活用することで、学校に通う目的の一つになる可能性があると感じた。

そこで本研究では、現代の教育課題である不登校児童の増加や学習医用区の低下に対する解決策として、ゲーミフィケーションを学校生活に取り入れる可能性を検討したものである。ゲームを好む子どもたちが学習や学校生活により積極的に参加する仕掛けを提供することで、彼らの無気力を軽減し、学びの意欲を高めることが可能ではないかと検討した。

小学校国語「読むこと」の授業への動機づけ ―自己調整スキルの獲得を目指した授業―

齊藤 彩音

私は、教育実習や塾でのアルバイトの経験から、子どもたちの中に「文章を読むこと」に抵抗をもった子がいると知った。そこで、子どもたちが主体的に取り組む授業を行うために、動機づけについて調べた。そして、動機づけで得た効果を継続させるために、子どもが自らの学習を俯瞰し、振り返りによって言語化し、自分にとってよりよい学びを模索していく力である「自己調整スキル」について考える。

「自己調整スキル」の獲得を目指した授業では、「見通しを立てること」、「自己効力感を高めること」、「効果的な振り返りを行うこと」の3つの視点が必要であることが分かった。

第1章では、令和6年度全国学力・学習状況地調査のアンケートの集計結果を基に、児童の実態を述べた。第2章では、国語科の「C読むこと」の領域の内容を整理して示した。第3章では、動機づけと「自己調整スキル」を獲得する過程や教師の手立てを述べた。第4章では、「自己調整スキル」を獲得するための授業提案を行った。そして、最後に「自己調整スキル」を獲得するために意識するべき3つの視点についての私見を述べた。

読書指導の必要性和授業での効果的な活用について ―並行読書を用いた授業提案を基に―

岡 葉月

学校には、本に触れる機会がたくさんあり、「読書」が大切な活動であることが分かる。だが、そもそもなぜ「読書」という活動が重要視されているのか疑問に思ったことが研究動機である。また、高度情報化社会である現在の日本でも、日ごろから本に親しみ、生涯の楽しみとして読書を取り入れてほしいと考えた。そこで、本論文では、読書によって身に付く力や読書指導の必要性について明らかにする。そして、読書指導と国語科を組み合わせた授業として「並行読書」という指導方法を提案し、研究を行っていく。

本研究では、「読書」を通して、国語力だけでなく、これからの時代に求められる「確かな学力」を身に付けるためにも必要であることを明らかにした。また、先行研究を基に「並行読書」の効果的な活用について明らかにし、授業提案を行った。

構成は以下の通りである。第1章では、読書の必要性について、確かな学力との関連を踏まえて述べた。第2章では、「並行読書」で期待される効果や活用方法について、先行研究を基に述べた。第3章では、教育実習での実践を紹介した後、「並行読書」をどのように活用するかについて述べた。第4章では、第3章を基に、実際に「並行読書」を活用した授業提案を行った。

昔の人のものの見方・感じ方を知る国語科授業 —古典芸能の教材化を通して—

平井 悠雅

私は、本研究は、学校教育における伝統芸能の新たな可能性を見いだすことを目的に、特に「講談」という伝統芸能の教材化に焦点を当てて進めた。現在、小学校国語科では「狂言」など特定の伝統芸能に焦点が当てられている一方で、他の伝統芸能を教材化する試みは限られている。特に、「講談」のような芸能の教材化に関しては、授業実践例が不足しており、指導や評価の方法が未整備であることが課題である。

本研究では、学習指導要領や教科書における伝統芸能の取り扱いを分析し、講談の特徴や教育的価値を検討したうえで、講談『扇の的』を題材として具体的な授業提案を行った。さらに、この提案をもとに、「昔の人のものの見方や考え方」評価する方法や、他の伝統芸能と比較しながら、児童が多様な文化に触れる学びを拡充する方策について考察した。

第1章では、学習指導要領および教科書の現状を整理し、小学校教育における伝統芸能教材の課題を明らかにした。第2章では、講談の持つ特徴や教育的価値を踏まえ、具体的な教材設定と授業計画を提案した。第3章では、授業提案に対する考察を行い、講談を教材化する際の課題と今後の可能性を論じた。最後に、第4章で研究の総括と今後の研究課題を述べた。

本研究を通じて、児童が多様な日本文化に親しむ機会を広げ、伝統芸能を通じて日本の言語文化を学ぶ意義を考えるきっかけになることを期待する。

個別最適な学びと協働的な学びの一体化へ向けて —6年「読むこと」の授業において—

青山 絢菜

本研究の動機としては、教育実習や様々な講義を通して特別な支援や日本語指導を必要とする児童、外国ルーツをもつ児童などの増加を知った。また、情報化や国際化が進み変化の激しい社会で生きていく子供たちは多様な他者と協働しながら、よりよい未来のために学び続ける力が必要になる。そのために、個別最適な学びと協働的な学びの一体化を小学校の段階から実現させたいと考えたからである。

結論としては、思考ツールの活用等を通して、個別最適な学びと協働的な学びの一体化を行うことにより、自身の考えと他者の考えの理解を深め、新たな考えを生み出せると主張した。今後は、学年や個々の発達に合った支援と誰もが協働的に学べる授業を実践していく。

本論文は、全4章の構成である。第1章では、個別最適な学びと協働的な学びの一体化の必要性について述べた。第2章では、教育における思考ツールの種類の紹介とそれらの活用について述べた。第3章では、教育実習で実際に行った第6学年の授業を取り扱った。個別最適な学びと協働的な学びの一体化を取り入れた箇所を取り上げ、課題と改善点について述べた。第4章では、今後の課題について述べた。

理科

構成主義的な理科授業における学習問題成立の条件

相馬 悠人

令和4年度全国学力・学習状況調査での結果から、小学校理科において気づいたことを基に分析して解釈し、適切な問題を見いだすことに課題があることがわかった。また、自然の現象について、知識を日常生活に関連付けて理解することにも引き続き課題が見られることもわかった。このような各課題に対して文部科学省は、新指導要領で「主体的・対話的で深い学び」の徹底やその視点からの授業改善を求めている。本研究では、子どもの課題である「適切な問題を見いだすこと」に着目し、学習問題成立の条件を、授業分析を通して考察した。第1章では、本研究の背景にある問題の所在と研究の目的について述べた。第2章では、ピアジェとヴィゴツキーの理論をもとに現代の教育における構成主義と、構成主義的な理科授業、また学習問題が成立することについて述べた。第3章では、学習問題が成立するための条件について2つの条件があることを述べ、2つの視点をもとに八嶋真理子氏の実践授業を分析した。分析の結

果、学習問題が成立するためには、追求すべき事象に対して、子どもの目が物理的かつ認知的に向いている必要があることがわかった。第4章では今後の展望として、マーケティング理論における4Pと教育との共通項と教育への応用について考察し、教育への応用することで子どもの意欲の喚起につながる可能性が見出すことができた。

異学年集団での話し合いにおける科学概念の変容について 一目指せ！虫博士の実践を通してー

蛭原 弘貴

本研究では、「第4期教育振興基本計画」で提唱された「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を実現するためには、多様な他者との協働した学びが求められていることを明らかにした。また、令和4年度全国学力・学習状況調査において、多様な視点を取り入れ、他者と協働しながら科学的思考を深める力が不足していることを明らかにした。そこで、筆者は、異学年集団を対象とした協働活動を通して、素朴概念や誤概念を科学概念に変容できる理科授業デザインをすることとした。

第1章では、本研究の背景にある問題の所在と目的について述べた。第2章では、異学年集団での学びの意義を整理し、ウェルビーイングの向上と学習指導要領の関係性、子どもの既存の素朴概念、描画法について述べた。そして、理科授業における、異学年集団、協働的な活動に着目した授業をデザインした。第3章では、理科教授・学習プロセス（小野瀬・佐藤，2020）を援用し、異学年集団、協働活動、素朴概念、誤概念に着目する授業をデザインした。その実践で活用したワークシートと参加した子どものインタビューを分析した。分析の結果、異学年集団という多様な他者と協働して問題解決を行うことが学習において、有効であることが明らかになった

協働的な学びに繋がる理科講座学習のデザイン

村松 健斗

本研究は、異学年の子どもたちが協力して問題を解決する「協働的な学び」を重視した理科の講座学習をデザインし、その有用性を検証することを目的としている。対象は埼玉県八潮市の「八潮こども夢大学」に参加した小学校5年生から中学校1年生までの子ども9名である。

第1章では、近年の教育における「協働的な学び」の重要性を指摘し、研究の目的を明確にした。第2章では、小野瀬らが提唱する「理科教授・学習プロセスマップ」を活用して、異学年での協働的な学びを取り入れた講座のデザインを詳細に説明した。テーマは「1円玉と10円玉では、どちらが重い材質でできているか」であり、密度の概念を基にした問題解決を目指した。第3章では、各班の活動を、概念プロフィールを用いて分析し、感覚的な理解が実験や他班との情報共有を通じて理論的な理解に発展する過程を示した。また、協働的な学びが子どもたちの学びの深化や社会的スキルの向上に寄与することが確認された。第4章では、研究を総括し、異学年での協働的な学びが教育的に有用であることを結論付けた。

最終的に本研究では、異学年における協働的な学びが、子どもの科学的理解や社会的成長を促進することを明らかにし、その教育的意義を提言している。

小学校理科における非認知的能力と認知的能力が相互に関連し高め合っていく授業づくりの工夫 ー STEAM教育「骨パズルを完成させよう」の実践からー

中野 真緒

小学校学習指導要領（平成29年告示）理科編における、改訂の内容や、全国学力・学習状況調査の結果から、子どもの学力向上のためには、子ども自身の意識が大きく関わっていることが分かった。そして、それら認知的能力と非認知的能力は相互に関連し合っていることが分かった。これを受け、子どもの学習に対する意識に大きく関わっている非認知的能力が発揮されるような授業づくりが必要であると考えた。そこで、非認知的能力に着目した理科授業を提案することとした。第1章では、本研究の問題の所在と研究の目的について述べた。第2章では、非認知的能力にはどのようなものがあるのか、また、それらはどんな場面で発揮されるのかについて調べ、まとめた。第3章では、子どもが非認知的能力を発揮する場面を想定して授業デザイン・授業実践を行い、その実践結果をもとに

分析した。結果から、非認知的能力は子どもの授業に対する自信や積極性に関わっていることが分かった。第4章では、第4学年「人の体のつくりと運動」の単元において、非認知的能力が発揮できるだろうと想定した授業提案と教材研究を行った。第5章は本研究のまとめである。

千葉県における防災教育の実践案

米倉 幸

日本は世界でも有数の災害大国であり、大地震や津波、台風における大雨や土砂災害などの多くの自然災害に見舞われてきた。そのため、自然災害から自分の命を守るための知識や取り組みは非常に重要である。自然災害への理解を深めるとともに、適切な意思決定と行動選択をする力や、自助・共助ができる力が求められているため、自然災害に関する課題に対して、学校教育の果たす役割は大きいと考えられる。

そこで今回、自然災害から自らの命を守るための意識づけを、理科教育を通して行い、自然災害に対する正しい知識と理解を得るための授業を、発達の段階に合わせて提案することを目的とした。第1章は、本研究における問題の所在と研究の目的である。第2章は、地震や津波、豪雨などを過去の被害事例とともにまとめ、千葉県の定める防災教育の目標に合わせた授業提案をするために、千葉県の災害特性を明らかにした。第3章は、千葉県の防災教育の目標と千葉県船橋市の地形の特性を考慮した授業案を、低学年・中学年・高学年の発達の段階にあわせて提案した。

理科教授・学習プロセスマップによる授業分析と授業実践

ー 1円玉と10円玉はどちらが重い材質からできているのかの実践からー

梅澤 颯汀

本研究は、現代社会における予測困難な時代を背景に、「主体的・対話的で深い学び」を重視する平成29年度学習指導要領を基に、構成主義的な視点から講座学習をデザインし、その有用性を検討するものである。特に、子どもがもつ素朴概念を出発点とし、協働的な学びを通じて科学的概念へ変容させるプロセスを分析することを目的とした。

本研究では、「理科教授・学習プロセスマップ」を援用して授業デザインを構築し、その有用性を授業実践と分析から検証した。第1章では、構成主義的学習観の基礎や素朴概念の重要性、さらにプロセスマップと概念プロフィールの理論的枠組みを整理した。第2章では、4つの理科授業事例をプロセスマップに基づき分析し、子どもの考えの変容と教師の手立ての関連を明らかにした。第3章では、講座学習の授業デザインを実践し、協働的な学びを通じて、子ども自らが考えをつくり、科学的概念へ変容させるプロセスを分析した。

本研究を通じて、子どもが自らの考えを深め、科学的概念へと発展させる授業デザインの意義と可能性が示された。また、協働的な学びと教師の支援が、科学的概念形成を促進することが明らかになった。

算数

人気ボーカロイド曲の歌詞の変遷 — 計量テキスト分析を通して —

居場 大輝

本研究では、世代A(2007年~2012年)、世代B(2013年~2018年)、世代C(2019年~2024年)の3つの世代に区分して、人気ボーカロイド曲の歌詞の変遷を検討した。ボーカロイド曲再生回数ランキング上位曲から、各年代上位18曲ずつの計54曲を選定し、その歌詞について計量テキスト分析を行った。その結果、(1)世代Aでは「愛」と「現実逃避」を連想させる歌詞が特徴的であること、(2)世代Bでは「愛」と「アンビバレントな感情」を連想させる歌詞が特徴的であるとともに、それぞれの楽曲に特有の「インパクトのある語」が抽出されること、(3)世代Cでは「愛」と「現実逃避」を連想させる歌詞が特徴的であるとともに、それぞれの楽曲に特有の「インパクトのある語」が抽出されることが示された。以上から、2007年から現在に至るまでの人気ボーカロイド曲の歌詞の変遷の特徴を見出すことができた。

国士舘大学初等教育コースの模擬授業は学生にどのような影響を及ぼすのか

大澤 悠真

本研究では、国士舘大学初等教育コースの模擬授業が学生の教師としての資質・能力と教師志望度にどのような影響を及ぼすのかを検討した。初等教育コースの3・4年生にWEB調査を実施した（有効回答数31名）。その結果、以下3点の知見が得られた。第一に、初等教育コースの模擬授業には、「学習状態の認識」と「指導案の書き方・難しさ」の理解度を向上させる効果がある可能性が示された。第二に、初等教育コースの模擬授業には、授業における禁止・叱責・無視などの活用の仕方や落ち着かない児童の引き込み方などの指導技術を高めることには現状効果がない可能性が示された。第三に、初等教育コースの模擬授業には、学生の教職志望度に影響を及ぼすとは現状言えない可能性が示された。これらの結果から、今後の初等教育コースの模擬授業に対して、(1) 児童役に「優等生」や「問題児」などの役割を割り当てること、(2) 遂行フィードバックだけでなく、動機づけフィードバックや帰属フィードバックを充実させることを提案した。

高校野球において勝てる戦法とは？ — 105回・106回全国高校野球選手権大会を対象として —

坂部 秀途

本研究では、105回・106回全国高校野球選手権大会において、どのような戦法が得点と勝敗に影響を与えるのかを検討した。得点の規定要因分析（重回帰分析）の結果、105回大会（2023年）では単打、四死球、二塁打、三塁打、本塁打、失策の順に、106回大会（2024年）では単打、三塁打、二塁打、四死球、失策、犠飛の順に得点に有意に寄与することが示された。次に、勝敗の規定要因分析（ロジスティック回帰分析）の結果、105回大会では本塁打、二塁打、盗塁の順に、106回大会では犠打、単打の順に勝利に有意な正の寄与をすることが示された。また、105回・106回大会とも三振と凡打は、勝利に有意な負の寄与をすることが示された。本研究によって、105回・106回全国高校野球選手権大会において、得点と勝利の規定要因となる戦法に違いがあることを統計的に提示することができた。

社会・総合

小学校における‘命の学習’の在り方について

有島 幸汰

厚生労働省による小中高生の自殺者数年次比較では、令和3年は473人（小学生11人）、令和4年は過去最多の514人（小学生17人）と1年間に41人（小学生6人）増加している。昨年度の令和5年も513人（小学生13人）と、2年連続で小中高生の自殺者数は最多水準となり500人を連続超過している。この問題に対し、国の行っている調査やアンケート、政策をもとにその背景や原因を探っていく。そしてこの現状から、子どもがあらゆる困難に対し自殺という選択を選ぶこと無く、命を重んじることができるように、たくましく生きていくための徳・体的な‘生きる力’の教育方法を説いて子どもの自殺問題に迫る。

本論文では、この問題に対し、人格形成の基盤をつくる重要な時期となる小学校教育において、“命の学習”に焦点を当てる。中でも、‘生’の視点・‘成長’の視点・‘死’の視点に着目し、それぞれの視点で命の偶然性・連続性・有限性の学習を論じ、子どもが自他を尊重する意識や自己肯定感を高く持てるように支援を行い、命の輝きに目を向けることで‘生きる力’の育成を目指す小学校6年間でのカリキュラムを提案する。

「特攻」を子供たちにどう教えるか

大橋 広弥

特攻（特別攻撃隊）は、第二次世界大戦中の日本軍が行った自爆攻撃で、特に戦争末期に多くの若者たちが命を捧げたことが知られている。この作戦は、敵艦船や航空機に対して自らの飛行機や船を突っ込ませ、爆発を引き起こすというものである。特攻隊員たちは「死をもって敵を討つ」といった使命感を抱きながら、20歳前後の少年た

ちが軸となって編成され、その死を戦争の「美德」として称賛されることをよく耳にする。しかし、特攻の実態は想像以上に過酷であり、隊員たちは戦争末期における日本軍の劣勢を背景に、無謀とも言える任務を一身に受け持っていた。特攻隊員の多くは、戦争を支配する上層部からの命令に従って戦死を遂げ、彼らが戦った理由やその背景には、国家主義や軍国主義が強く影響していた。特攻隊員の多くが家族や人生を犠牲にし、死後もその名誉を語られているが、その真実については触れられることなく時が流れている。

現在、特攻についての認識は多くの面で変わり、小中高の教育現場でも取り扱う機会が増えているが、その真実に触れる機会は依然として少ない。特攻という戦争の一側面を教えることは、単にその悲劇的な歴史を学ぶだけでなく、戦争の無意味さや個人の命の尊さ、また国家が若者を戦争に駆り立てる危険性についても考えさせる重要な契機となる。特攻の歴史を学ぶことは、平和教育の一環として、未来の戦争を避けるための教訓を次世代に伝えることができる重要なテーマとなる。

「平和教育」再考

佐藤 達弥

小学生時代に転校を2度経験し、名古屋、広島、川崎の3都市で教育を受けてきた。当時の広島の平和教育と名古屋・川崎の平和教育では、大きな差があることに疑念を持った。世界平和が謳われる中、紛争や核開発が絶えない現況であるが故に、現状の平和教育から脱却することが喫緊の課題である。

この課題に対し、原爆の実態や原爆を巡る諸問題を改めて捉えるとともに、従来の平和教育に関する調査や分析、平和教育の定義、学習指導要領や「平和教育の3つの目標」で定められている目標等を再考する。そして「平和教育の3つの目標」の達成度の向上と地域格差の解消が見込める平和教育・原爆教育の在り方に迫る。

本論文では、この課題に対し、小学校から高等学校における平和教育に焦点を当て、次世代を担う児童・生徒一人一人が「平和」について確かな考えを持ち、何かしらの形で「平和」に貢献する活動に取り組む意識を育むことを目指している。更にその具現化として、小学校から高等学校における「平和教育プログラム」を志向して、小学校6年生における「実践指導計画」を提案する。

日本の伝統行事と料理

大久保 彩花

私たちの生活の中には、古くから受け継がれた伝統行事が多く存在している。それらは、時が経ち形を変えながらも私たちの生活の中に深く組み込まれている。伝統行事をより深く知ることには、現在の行事に対しての私たちの考えが深まり、生活を豊かにする。

正月は、お年玉やおせち料理、初詣などが現在でも広く親しまれており、その伝統は特に色濃く残っている。

本論文では、日本の古くからの伝統行事の歴史的経緯を踏まえ、五節句や節会について追究することで、より深く伝統行事について知ることができると考えた。そしてこの正月を中心とした授業の実践提案を行う事を目指した。子供たちもよく知る正月について、より深く考え、家庭で過ごす正月をより豊かにすることのできる学習を目指す。

論文構成は、第1章では日本に残る伝統行事について五節句と節会について述べ、第2章では「正月」という行事を軸に取り上げる。第3章では「正月」についてどのように子供たちが学習していくかの実践提案を目指す。

伊藤博文と大日本帝国憲法

久保 瑞希

私たちの住む日本は、世界の中でも長い歴史のある国である。現在、私たちの生活にはたくさんの決まりがあり、最高法規である憲法をもとに法律が制定される法治国家でとなっている。憲法で定められている範囲内でできまりを考え、法律として制定している政治家や官僚によって、私たちは日々の生活を送ることができている。

明治時代に作られた政治制度は、現在の政治制度の基となっていると言っても過言ではない。この制度の基盤と大日本帝国憲法を作った人物こそ、伊藤博文である。

伊藤が作成した大日本帝国憲法は、戦争を引き起こした原因の憲法とも言われているが、はたして本当にそうなのだろうか。実際に、当時の憲法の仕組みを理解していると言われると、完全に理解していないと考える。また、その仕組みについて義務教育段階では詳しく学習することがない。そこで本論文では、近代の政治体制を整えた伊藤博文と伊藤が作成した大日本帝国憲法について研究する。伊藤の性格や人間関係、生い立ちと功績、大日本帝国憲法の仕組みから伊藤の信念を紐解く。それらを踏まえて、小学校6年社会科において、伊藤博文と大日本帝国憲法を歴史学習の教材として、より深い視点から政治の仕組みが整えられてきたことを学ぶことができると考えた。暗記教科ではない歴史学習の面白さを求めて、一つの物語である事としての学習指導案を提案する。

日本の少子化問題について

蓼 敦 乙

現在進行形で発生している日本の問題の一つに、「少子高齢化問題」がある。この問題は、約24年前の1990年ごろに起こった「1.57ショック」が始まりである。第二次ベビーブームから子どもの出生数は減り続けていたが、このような日本の政治的問題にまで発展したのは、第二次ベビーブームが終わった約20年弱後のことである。また、高齢化問題が浮き彫りになり始めたのは、1970年ごろの「高齢化社会」の具体化である。この少子高齢化問題というのは、現在も解決すべき問題の一つである。しかしながら、小学生はこの問題への知識や意識が浅い。そこで今回、「少子高齢化問題」の現在および過去について研究し、その問題の中でも少子化問題に重点を置き、テーマを「日本の少子化問題について」とし、今、私たちにできることを考えることとした。

論文構成は、第1章では現在の子どもの出生数や高齢化率などの数字から子どもがどれほど減少し、高齢者がどれほど増加しているのかに迫っていく。第2章では少子化問題及び高齢化問題の原因と対策について抑えていく。以上を踏まえ、第3章では改めて現状の少子化問題について追究し、それらを教材とした実際の学習指導案を分析し、実践提案していく。

歴史学習における「新撰組」の取り扱いについて

白 田 琉 偉

「新撰組」は、江戸時代末期の幕末時代の京都で、過激な尊王攘夷派を取り締まっていた浪士隊である。主な活躍として、京都に放火し混乱に乗じて天皇を連れ去ろうと画策していた、長州・土佐藩の志士たちが潜伏していた拠点に乗り込み肅清した、池田屋事件がある。また、大政奉還後の旧幕府軍と新政府軍の間で起きた戊辰戦争では、副長の土方を筆頭に旧幕府軍として、戊辰戦争の最後の戦いである函館戦争まで戦い続けている。

このように幕末という動乱の時代において様々な活躍をしている新撰組は、現代の多くのドラマや漫画などで取り扱われている。そのため新撰組は、ある程度知名度のある歴史上の組織であるといえる。しかし新撰組は、小学校、中学校、高等学校の歴史学習においてはほとんど触れられることがなく、触れられたとしても名前が出てくる程度の扱いである。私は、児童・生徒の学習において最も大切なものは興味・関心であると考えており、数多くのドラマや漫画で扱われる新撰組の位置づけは、児童生徒の興味・関心を引き深めるものであると考えている。

そこで今回、テーマを「歴史学習における『新撰組』の取り扱いについて」とし、主な働きである尊王攘夷運動の鎮圧や戊辰戦争への参加の経緯や人物像について研究するとともに、小・中・高等学校での新撰組の取り扱い方を提案する。

江戸の暮らしとSDGs

境 柚 香

現代社会は、気候変動、紛争・戦争、人権問題、人種差別、貧困、環境破壊など様々な現代の問題が山積している。人類がこのまま安定して地球で暮らし続けることが出来なくなるのではないかという危機感から、2015年には、「持続可能な世界」を実現するために国連がSDGsという具体的な17の目標を掲げた。本論文では、特にSDGsの中の「環境に関する目標」に焦点を当てて、「江戸の暮らし」に焦点を当てて研究を進める。

これからの未来を生きる子供達は、地球や地球上のあらゆる自然環境や生命を守る姿勢を持ち、SDGsを意識し

て生活することが必要とされる。しかしながら、今日の教育現場ではSDGs教育が活発に行われているわけではない。そこで今回、環境問題解決の理想的な姿と言われている「江戸の暮らし」に興味を持つと共に、江戸の町は本当に「エコタウン」だったのか、江戸の暮らしの知恵を現代に生かすことはできないかに視点を置き、江戸の暮らしとSDGs」というテーマの基、エコタウン江戸の暮らしについて研究していく。そしてそれを踏まえ、小学校における総合的な学習の時間において「エコタウン江戸の暮らしから考えるSDGs」として、実践指導案を提案していく。

図工

ジャケットデザイン役割について — 渋谷系音楽を事例に —

荻野 千裕

1990年代に流行した日本の音楽ジャンルに渋谷系音楽というものがある。筆者は音楽の内容を知らず、渋谷系音楽のCDジャケットデザインに魅了され購入を決めたという個人的経験を基に、ジャケットデザインのどこが魅力的だったのかと疑問に思ったことから、デザインの魅力について興味を抱いた。そこで自分がより魅力的に感じたジャケットデザインをデザインの要素ごとに分けその役割を考えることでジャケットデザインの魅力に迫れるのではと考えた。それが本研究の設定理由である。本研究は音楽の内容を知らず、CDのジャケットデザインに魅了され購入を決めたという個人的経験を基に、ジャケットデザインのどこが魅力的だったのかと疑問に思ったことから、筆者がもっとも多くの魅力的なジャケットデザインが存在すると考える渋谷系音楽のジャケットデザインに焦点を当てジャケットデザインの魅力を明らかにするべく研究を行った。手法、色、字体、モチーフなどジャケットデザインの構成要素に着目しそれぞれのデザインの役割について考えることで渋谷系音楽のジャケットデザインの魅力に迫る。第1章ではジャケットデザインを2つ選定し、それぞれのデザインを要素ごとにわけながらそのデザインの役割について考える。第2章では1章で挙げたデザインの役割を参考に渋谷系音楽のジャケットデザインの魅力を明らかにする。

家紋のデザインについての研究

山田 泰佑

私が本研究を行おうと思った動機は、家紋の造形的特性の素晴らしさに気づき、変遷や起源、作成方法について理解を深めたいという思いからである。

家紋とは代々その家に伝わるものであり、その起源には武家の家紋と公家の家紋の二種類あることと、家紋が一般化していったのには武家社会と深く関係あることの二つが分かった。つまり、今の家紋を辿ると武家社会にまでいきあたる。さらに、武家社会以前の平安時代にもその源流を見いだせる。

そもそも家紋が生まれた平安時代から現代までを振り返りたい。その分類はルーツが分かる家紋と名字という文献に基づき、下記のように分類できる。平安時代末期(源氏、平氏、藤原氏、橘氏)、鎌倉時代(源氏、平氏、北条氏)、南北朝時代(足利氏)、室町時代(足利氏)、安土桃山時代(織田氏、豊臣氏等の戦国大名)、江戸時代(徳川氏)である。これらの家系はどれも源氏、平氏、藤原氏、橘氏のいずれかに属している。これらを総称して源平藤橘という。家紋に関する文献を読んでいくと源平藤橘の家紋が現代の家紋のデザインの源流につながる事が分かった。

本研究では源平藤橘の家紋の名称、デザインの特徴について調べる。また、広範に渡る家紋のデザインの歴史を大まかに捉え、家紋の豊かさに触れたいと思う。

谷内六郎の絵について

濱崎 広太

本論文は、画家である谷内六郎の絵について研究することを目的として作成した論文である。第一章は谷内六郎の生い立ちについて述べる。彼の幼少期の出来事や少年時代の実際生活背景が絵の表現に大きく影響する。続いて第二章では『週刊新潮』の表紙である谷内の絵について、表現の傾向別に分けて調べる。具体的な分け方は、①恐怖や焦りを

感じる作品 ②幼少期特有の不思議な感覚が表現されている作品 ③音が表現されている作品といったように大きく3つに分類した。第三章では、谷内六郎の絵の素晴らしさを述べる。小説家の橋本治によれば、「フランス語の『シュール』は『上』の意味だから、シュールリアリズムは、『現実を越えた上』になるのだろうが、谷内六郎は、『現実を越えたものが現実の中に収まって、そのまま現実になっている』なのである。」(橋本治ほか 2021: 78)と述べている。絵を見た人はシュールリアリズムを感じないが、谷内六郎はシュールリアリストであるということが橋本治の意見である。では、なぜシュールリアリストであるのにも関わらず現実を越えた作品だと感じないのか、ということをもとにして考えてみたい。第四章では筆者が谷内の作品から学んだことや、これから生きる上での抱負や希望を述べる。

友禪の美しさ —美術技法から考える—

川人 大輝

私が本研究を行おうと思った動機は着物の美しさに惹かれ、その背後にある多様な技法と職人の制作意図についての理解を深めたいという思いからである。

着物の美しさは様々な美術技法を駆使して生み出されている。それぞれの技法には独自の美的特性があり、それぞれが組み合わさることで着物の総合的な美しさが形成されている。

特に友禪染はその複雑で緻密な図案と豊かな色彩で際立っている。友禪染は、職人の高度な技術と細やかな手作業が要求され、これにより一枚一枚の着物が芸術作品としての価値を持つ。

友禪染を中心に調べる理由は、友禪の技法が持つ多様な主題と美的特性にある。友禪染は自然の風景や花鳥風月などの主題、日本の伝統的な美意識を描写することができ、これにより着物に深い情緒と品格を与えるのである。また友禪染は他の染色技法や装飾技法、刺繍と組み合わさることで着物全体の美を一層引き立てる。

本研究では友禪染を中心に各技法がどのように美しさを創出しているかを探求する。また本研究を通して着物に使用される技法の美しさを理解し、他の日本の伝統的な美術作品との関りを美術技法の観点から考えていきたい。

酒井式描画のシナリオとはなにか? —高学年の描画を例—

山本 大智

筆者は小学生時代の図画工作科の描画の授業が苦手だった。その理由はどのような絵を描きたいのかを考える発想面とそれを表現する技術面という二つであったと考えられる。この問題を扱うにあたり出会ったのが『酒井式描画のシナリオ』であった。

第1章では酒井式描画のシナリオについて調べる。調べる内容は、酒井式描画指導の基礎基本と題材ごとにある表現である。描画の基礎基本は、各シナリオの原理原則、造形要素と造形言語、表現技術、描画材料についてまとめる。

第2章では高学年児童の描画題材の課題を探りたい。これについては「対象の視覚像に囚われ、表現技術の未熟さを自覚するのは珍しいことではない。これは描く事が対象の機械的な再現表現と感じる時に抱く抵抗感である。描画の危機と呼ばれるのはこの時期である。」とあり、その中でも「対象の視覚像に囚われ、表現技術の未熟さを自覚するのは珍しいことではない」という部分に注目した。どのような表現技術の未熟さを自覚することで再現表現時に抵抗を抱くのか、その描画題材の取り組みを描画の危機を中心に考えていく。

第3章では、前2章でまとめたことから高学年の描画指導を行うときにどのような声掛けや指導を行えばよいのかを考えていく。

マグリット研究 —彼の発想を中心に—

鈴木 杏汰

ベルギーの画家ルネ・マグリットの作品は、現実と非現実の狭間を独自のスタイルによって、観る者の心理に深い印象を残す。例えば、《赤いモデル》では、靴のように見えるがよく見ると指先が描かれていたり、《選択的親和性》では、卵が鳥籠の中に入っていたり、また、《これは一切れのチーズである》では、一切れのチーズの絵を実際にガラスの容器に入れ、匂いがしてくるような仕掛けを施したり、不思議な感覚に襲われる。彼の作品を観ると気持ちの悪

さを感じる反面、絵画の可能性に気付かされ、興味が湧いてしまう。彼自身も自分の作品の可能性に挑戦しており、「ものを衝撃的に見せる」方法を自ら発信していた。その言葉の中に、「イメージと言葉を組み合わせる」や「イメージに偽りの身分を与える」といった言葉を残しており、言葉を用いて鑑賞者の心理状況に揺さぶりをかける作品は、彼の作品の面白さに繋がっているのではないだろうか。

本研究では、彼の芸術はどのように発展して独創的な作品に繋がっていったのかを彼が生まれてから芸術家に至るまでの過程をまとめ、シュールレアリスム宣言をしたアンドレ・ブルトンとの関係に迫る。そして、彼の作品を年代ごとに区切り読み取ることを通じて、彼の作品意図に迫ることを目的とする。

体育

運動好きの児童を増やすための体育授業に関する一考察

岩瀬 主騎

近年、社会的な構造の変化によって、運動が好きな児童の減少が問題視されている。文部科学省によると、積極的に運動する子どもとそうでない子どもの二極化が指摘されているという。

そこで本研究は、多くの児童がつまずくと考えられる器械運動(跳び箱運動)に焦点を当てて運動好きな児童を増やすための体育授業の検討を目的とする。そのために、K小学校第5学年第6学年を対象に意識調査と、それに加え文献研究を行った。

意識調査では、体育授業を好きと回答している児童の中にも普段運動をしていない・運動が好きではない児童がいるということ。体育の授業が好きな児童とそうでない児童の両方が「得意な内容の時」「ゲームする時」などに楽しいと感じ、「難しい内容」「うまくいかない時」などに楽しくないと感じることがわかった。

文献研究では、児童が跳び箱運動を効果的に行うには児童が成功体験を多く感じることでできる授業づくりを行っていくことが必要だとわかった。

本研究では、実際に検証授業を行ったわけではなく、体育授業で実際に運動の良さや楽しさに気付くことができ普段から運動をするようになるのか不確かな部分があるので、今後は実際に小学校で実践し、検証していく。

小学校体育授業における効果的な男女共習授業の在り方

八巻 朱里

本研究では、体育授業においてどの学年、どの領域に性差が大きく出るのかを明らかにし、ジェンダー平等という形式的なカリキュラムの中で、どう男女の性差に配慮しながら授業進行していくべきなのかを考え、最適な授業方法を考案することを目的とした。

研究の結果、男女での経験の差や筋力差が出るゲームやボール運動の領域では、低学年の時から性差を感じる場面が多いこと。器械運動や水泳等の補助や身体に触れる援助が必要な領域は、低学年から高学年に向けて指導しづらくなるということが分かった。

また、意識調査の結果より、ゲームやボール運動の領域に性差が生まれる原因として、生物学的筋力差がある為、男女の経験差がある為の2つが挙げられた。そこで本研究より明らかとなったことを踏まえ、男女の経験差に着目し、低学年の段階から性別に関わらず、運動の機会を平等に提供し、様々な種類のスポーツ、遊び、運動を経験させ、男女ではなく個々の成長に応じた指導を行うことを今後の課題にしたい。

小学校体育授業におけるボート競技に結びつく効果的な教材に関する実践的研究

高田 潤征

本研究の目的は、小学校体育の授業における「ボート競技」の導入の可能性、「ボート競技」に結びつく効果的な教材を明らかにすることである。そこで小学校の体育の授業に導入するにあたり、意識調査とインタビュー調査を

実施し、それに伴い検証授業を行った。

その結果、ボート未経験の児童がほとんどであったが、ボートに興味・関心があることが分かった。また、教師を対象とした意識調査結果からボート経験者は1人しかいなかったが、チーム力を高める運動や肺活量を高める運動を取り入れるなど賛同的な意見が多いことが分かった。さらに、ボート経験者におけるインタビュー調査では、ボートに必要な能力は、筋力や体幹・持久力であることがわかり、どちらの能力も水泳や長距離走などに生かせることが明確となった。加えて、ボート未経験者に対しての検証授業では、授業後の意識調査から全員が、ボートに対して興味・関心を持つことができ、小学校の授業でやってみたかったなどボートに対して前向きな意見が多くみられた。

この4つの調査結果から、ボートに必要な能力は小学校中学年のA体づくり運動につながりそして水泳運動にも必要な能力を養うことができ、小学校体育の授業への「ボート競技」の導入、「ボート競技」に結びつく教材を明らかにできることが推測された。

小学生の自己肯定感がスポーツパフォーマンスに与える影響について —サッカーのコーチングを通して—

福光 悠斗

本研究では、サッカー育成年代の中で、小学校児童に着目し、子どもが長く、楽しくサッカーを楽しむことができる環境を作ることを目的としている。

近年では、子どもの自己肯定感の低下が問題視されてきた。だが、東京都教職員研修センターが令和2年に実施した、自尊感情や自己肯定感に関する調査によると、平成21年度よりも高い数値となった。しかし、諸外国と比較すると、まだまだ高いと言える水準ではないと言える。

そこで筆者は、指導者の声掛けで子供の自己肯定感を高めることができるのではないかと考え、検証授業を行いその効果を確認した。今回の検証では、指導者の声掛けを称賛因子、鼓舞因子、沈黙の3つの方法を使用し、子どもの自己肯定感の推移について調査を行った。その結果、指導者の称賛因子での検証が最も向上した結果となり、「褒め」についての深い理解が必要であることが明らかとなった。

今後の課題としては、今回はスポーツに対する自己肯定感についての研究であるため、子ども自身が持つ自己肯定感を上げる方法についても、今後研究していく。

コミュニケーションがスポーツパフォーマンスに与える影響について

小島 夢南

スポーツをするうえで欠かせないのが『コミュニケーション』である。チームスポーツであれ、個人スポーツであれ、監督や仲間と互いの考えや気持ちを伝える意思疎通を行い、同じ目標に向かって鼓舞し合う情報の伝達が必要不可欠である。

なかでも、チームスポーツは他者とのコミュニケーションを取る場が多く、仲間との信頼関係を築くうえで重要なものである。

そこで本研究では、実際に過去にスポーツを行ったときに、コミュニケーションがどのようにスポーツに影響をもたらしたのかをアンケート調査し明らかにした。その結果、スポーツをするうえでコミュニケーションは必要かという設問には、100%必要であるという回答があった。また、過去に経験したことのあるスポーツ上位5項目は必ずしも、印象に残ったスポーツと一致しないことが分かった。また、スポーツを通して身についたことや重要であることを挙げると、どちらも『コミュニケーション』が一番票が多く、スポーツとコミュニケーションは、切っても切れない関係であることが分かった。

体育授業と登校意欲の関係について

永宮 亜優

本研究では、様々な授業科目の中でも授業に対する意識や運動強度に個人差が出てしまいやすい「体育」の授業に焦点を当て、不登校に関連した先行研究や意識調査をもとに、「体育授業」と「登校意欲」の関係性を明らかに

することを目的とした。

研究の結果、不登校の要因は人間関係やストレス、心身の不調など多岐にわたることが示され、体育授業が苦手であることが不登校につながった事例もあることがわかった。また、児童の約90%が体育授業に対して肯定的な印象を持っている一方で、約10%は否定的であり、これが登校意欲に影響を与える可能性があることが明らかとなった。さらに、体育授業は、登校意欲だけでなく、他の授業への集中力や意欲にも影響を及ぼすことが示唆された。

今後の課題としては、体育授業が児童に与える影響を考慮した満足度の高い授業の提供の仕方についての更なる追求が考えられる。そして、体育の授業に対し肯定的である児童、否定的である児童、どちらにとっても満足度が得られるような体育授業を考案していく。また、体育授業が与える前後の授業への影響に焦点を当て、研究を継続していきたい。

小学校における運動会の現代的意義に関する一考察

小林 誠

本研究では、誰もが経験のある運動会の現代的意義や児童・教師はどのような運動会を望んでいるのか、運動会と働き方改革との繋がりを明らかにして、運動会の展望をより良いものにしていくことが目的である。そのため、運動会のねらいと変遷に関する文献研究や、小学校の教員・高学年児童に運動会に関する意識調査を行った。

研究の結果、運動会は保護者や地域からの意見や時代の変化に合わせて、より良いものに改善していくことがわかった。また、運動会に対する意見では、児童・教師の運動会に対する思いが明らかとなった。より良い運動会にするためには、開催時間に関わらず、普段の体育で身につけたものを披露する場が運動会であることを子どもたちにも認識させる必要があるということが確認された。

運動会は、児童同士の関わりも深くなり、学級経営にも大きく影響を及ぼすだろう。働き方改革や子供の現状は時代や場所によって大きく変わるため、その都度その時代や場所にあった運動会の形態を学校全体で考えていく必要があると考察できた。

児童が楽しく受けられる小学校体育科の授業について

中島 達哉

本研究では、現代の児童が体育の授業に対してどのような感情を抱いているのかを明らかにし、体育の授業が好き嫌い、体を動かすことが得意不得意関係なく楽しく受けられる授業を考え、今後の体育の授業の一助とすることが目的である。そのため、体育の授業に関する文献研究や、小学校中高学年児童に体育の授業に関しての意識調査を行い、結果を基に検証授業案を考案した。そして検証授業の対象を大学生にして実践した。

検証授業の結果、中学年リレーの授業においてテークオーバーゾーンの範囲を広くしバトンパスを工夫することで誰も楽しく授業を受けられることが明らかになった。また児童同士での話し合いの場、意見を共有する時間を多く設けることでも児童が前向きに授業に取り組めることも明らかとなった。しかしテークオーバーゾーンの幅を広くすること、バトンパスの工夫によって特定の児童の運動量が少なくなってしまうことが課題・改善点として挙げられた。今後は、今回挙げられた課題・改善点を踏まえた授業を考案するとともに、他の領域でも誰もが楽しく受けられる体育科の授業について研究していきたい。

道徳・特活

現代の道徳教育について考える

— アリストテレス『ニコマコス倫理学』を手がかりに —

中原 秀典

学校教育における活動はすべて、「人格の完成」を目指して行わなければならないと教育基本法第1条に明記されている。しかし「人格の完成」とは各人によって判断・解釈が異なるものであり、インクルーシブ教育が進みつつ

ある現代では、今一度教師がその意味合いについて再考する必要があると考えた。そこで、学校教育の要として位置づけられている道徳教育をもって、「人格の完成」にむけて、本論で考えを深めたいと思う。特に、時代や年齢が進むにつれ変化してしまいやすい善悪の判断について、考えを深めるべきだと考えたため、倫理学の古典であるアリストテレスの『ニコマコス倫理学』を手がかりに、少し深く考えてみたい。

第1節では、ニコマコス倫理学とは何かについて述べている。幸福になるためにどうあるべきか、道徳という言葉を使わずに、「徳(アレテー)」を用いて、善き人になるための行動を考えている。

第2節では、ニコマコス倫理学のそれぞれの項目を簡単にではあるが説明している。アリストテレスが提唱した「中間性(中庸)」が、どのように学校教育にて活用できるのか、本論の結論で述べている。

教室環境づくりと特別活動

平 陸 人

私は卒業レポートで、教室環境づくりと、それが特別活動に与える影響について取り上げた。テーマ設定の理由は、教育実習に行った際に様々な学年や学級を見て、教室の掲示物やレイアウトなど、教室環境にはどのような方法や工夫があるのか興味を持ったからである。そして、教室環境を整えることで、特別活動にどのような効果があるのか。とくに学級活動は教室内で行われる活動であり、教室環境が子どもたちの成長に及ぼす影響は決して少なくはないはずであると考えたため調べることにした。

内容としては3節で構成されている。第1節では、教室環境とは何かについて、物理的、社会的、文化的な要素から考えたことを述べた。第2節では、教室ギアの具体例について述べた。第3節では、教室ギアによる教室環境の整備が特別活動に与える影響について述べた。

結論としては、教室環境の整備は、特別活動における活動の質や効果に直結することが分かった。物理的な環境の整備だけでなく、教師と児童の関係や文化的な要素を総合的に考慮して教室環境を整えることが、子どもたちの成長や学びを支援するために不可欠である。教室環境が整備されていることで、特別活動の効果を最大限に引き出すことができることも理解できた。

道徳は教育できるのか

松本 宗也

本レポートは「道徳は教育できるのか？」をテーマに、道徳教育の本質と可能性を考察している。私は道徳の曖昧な概念性と自己の実践不足を踏まえ、道徳教育の意義を問い直す必要性を感じている。道徳の定義については、アリストテレスの「習慣としての徳」やカントの「義務論」、功利主義者の「結果主義」など、多様な哲学的視点があり、現代社会では文化的相対性も加味した議論が必要とされる。日本の道徳教育は戦後の民主主義教育の流れを受け、「特別の教科 道徳」として制度化され、現在は「考え、議論する道徳」を重視している。しかし、価値観の押し付けや抽象的テーマの理解の難しさが課題として挙げられる。私は教育実習の経験から、児童が抽象的な価値を具体的な行動に結びつけるのが難しいことを知り、具体的事例を活用する工夫が効果的であるとした。さらに、児童が自己概念を確立し、他者との関わりを通じて道徳的成長を遂げる重要性を知り、教師は児童と共に学び、柔軟な指導を行う必要があると結論づけた。道徳教育は単なる規範の教示ではなく、児童が主体的に考え行動する力を育むための対話的プロセスであるべきだと学ぶことができた。

不登校の現状と効果的な支援方法

佐竹 秦菜

近年日本の不登校問題が深刻化している。不登校児童生徒数は年々増加していくばかりである。これから教育現場に立つ者にとって、不登校という現象は、避けて通れない重要なテーマである。そのため、実際に不登校児童生徒を支援する際、どのように関わるべきかを理解しておくことは不可欠であり、その必要性を強く感じたため、このテーマを設定した。本レポートでは、不登校児童生徒の現状を把握するとともに、具体的な支援方法や考え方を

深めていくことを目的としている。

第1節では、不登校の現状とその原因について述べる。不登校児童生徒数の推移をデータを用いて考察し、不登校の原因を「心理的・個人的要因」「家庭環境」「学校環境」「社会的要因」の4つの観点から分析する。それぞれの要因がどのように絡み合い、不登校に至るのかを明らかにしていく。第2節では、不登校児童生徒への効果的な支援方法について述べる。過去に行われた支援事例を挙げながら、具体的な支援方法の効果を検証し、どのような取り組みが有効であるかを考察する。また、現在の支援において改善が求められる点についても考える。そして、最後に不登校児童生徒に対して周囲の大人がどのように関わるべきかをまとめ、本レポートの結論とする。

道徳教育の「特別の教科」化による変化と課題

末武 琉輝

道徳教育はこれまで正式な教科ではなく、教育外活動として行われてきた。しかし、各地でいじめ問題が深刻化していることを受け、2018年度(2015年に改訂された学習指導要領)に「特別の教科 道徳」として正式に教科化された。

道徳教育がこれまでどのように行われてきたのか、「特別の教科」化したことでどのような変化や改善点があるのかを調べようと思ったことが本研究の動機である。

第1節では道徳教育の変遷や目標をまとめた。第2節では教育外活動だった道徳科が「特別の教科」化される理由となった課題を量的課題と質的課題の2つに分けてまとめた。特に道徳は他の教科に比べて軽視される傾向にあったため、進みが遅い教科に振り替えられる場面が多かった。こういった経緯も道徳が「特別の教科」化した理由に含まれていると考えている。第3節では道徳の「特別の教科」化による変化を5つのポイントにわけてまとめた。第4節では「特別の教科」化したことによって学校現場ではどのような変化があったのか、文部科学省によるアンケートを基にまとめた。

現場で働いている教員の声を聞き、「特別の教科 道徳」とどう向き合っていくかを、本研究を通して考えていきたい。そして、自分の成長につなげていきたい。

登校児童の課題とその支援について

土志田 拓海

教育における不登校問題は、個人、家族、学校、地域社会、そして社会全体にとって重要な課題である。不登校児童数は近年では35万人いるといわれている。文部科学省の調査によると、不登校児童数は年々増加傾向にある。本研究では、「登校拒否」と「不登校」というそれぞれの呼び名ごとの当時の要因やそれらに対する支援策について調査していった。第1節では、「登校拒否」のことについて取り上げた。1990年頃までの主流的な呼ばれ方の登校拒否は画一的な教育制度や、厳しい規律が重視されていました。生徒に対する期待が高く、成績や行動が重要視される傾向が強かったため、精神的なプレッシャーを感じる子どもが多かったようだ。この時代に合わせて、カウンセリング制度や代替教育機関の整備などの支援策が講じられるようになった。第2節では、「不登校」と呼ばれるようになった現代の実態について調査を行った。近代の不登校の要因や不登校の多様化による種類ごとのそれぞれの要因、支援策についての研究を行い、教師・学校・家庭でのそれぞれの立場からの不登校児童への配慮や支援を調査を行った。

今後の道徳教育に必要な事とは

大崎 茜

道徳教育は戦前から行われており、第二次世界大戦以前は「修身」という名で学校での道徳教育が行われていた。戦後、修身は撤廃され、内容においても、幸福や理想を目指して共同社会の一員として働く自覚をもたせ、普遍的な国際性を持った人格を形成しようとするものになり、戦前と戦後で道徳教育は大きく変化した。そして1958(昭和33)年、戦後10年以上経って学習指導要領が改正され、公立の小中学校では、週1時間の「道徳の時間」を特設した。

現在の道徳教育は、これまで小・中学校の道徳では、「教科」ではなく、特別活動などと同じ「領域」に位置付けられ、「道徳の時間」と呼ばれていた。これに対して文科省は、道徳を「特別の教科 道徳」として教科化したので

ある。しかし、教科として道徳を実施するためには、教科書が必要となるため、民間の教科書会社が道徳の教科書を作成した。現状では、他の教科に振り替えられてしまったり、教員に道徳教育の理念が十分に理解されず、効果的な指導方法が確立されていないため、地域間、学校間、教師間の差が大きく、道徳教育に関する理解や道徳の時間の指導方法にばらつきが大きいことや、授業方法が、読み物の登場人物の心情を理解させるだけになってしまったり多くの問題点がある。

道徳教育は、子どもたちが激動の時代を生きていくうえでの基盤となる道徳心を養うことも重要である。だから、教員が指導法を身に付け、学び続けていく必要があるだろう。

幼児教育・生活

書くことへの意欲を高めるための授業づくり

—小学3年生国語科『わたしのたからもの』の実践から—

田中 明珠

本研究の目的は、文を書くことに抵抗感を示す子どもが多い中で、書くことへの抵抗感を減らし、児童が「書きたい」と感じられる授業の在り方を明らかにすることである。具体的には、書くことへの意欲を高めるためにイメージマップや3段階文章指導法を用いた原稿用紙の使用、教科横断的に図画工作科の絵を描く活動を取り入れることなどを組み込んで、単元『わたしのたからもの』の学習指導案を作成した。A市立B小学校3年C組31名の児童を対象に、授業を実践した。その結果、児童は、イメージマップや絵を描く活動を行うことで、イメージが広がり、書きたいこと伝えたいことを考えやすくなったり、文章を書くだけでなく、絵を描く活動を取り入れたりが意欲につながったりした。また、伝えたいことがあっても、人に伝わる文章をつくるのが難しかった児童が3段階文章指導法によって文章を整理することができた。文章化をしやすくするために、3段階文章指導法を用いた原稿用紙を用いることが有効であることが示された。

子どもの運動能力の低下を防ぐための保育実践

高花 ななみ

現代社会では、幼児の運動能力が低下している原因として、生活の利便性の高まりや都市化、デジタル機器の普及が挙げられる。文部科学省の「幼児期運動指針」では、運動が身体的な発達のみならず、認知能力や社会性の向上にも寄与することが強調されている。幼児期には多様な動きを経験し、遊びを通じて運動習慣を身につけることが重要である。運動能力の低下を防ぐためには日常生活で幼児期に身につけるべき基本動作を取り入れた遊びを積極的に行ったり、家庭でのお手伝いの場面で、子どもに運動を行う動機付けを行ったりすることが重要であると、考えられる。また、保護者の運動習慣が子どもの運動能力に影響を与えることが示されているため、保護者に対し、親子で運動をする親子運動会などの機会を設け、保育者から、保護者に日常の生活から運動をするような声かけをすることが重要であることが考えられる。保育現場では、自由遊びや環境作りを通じて、子どもが自発的に運動を楽しむことができるよう支援することが求められる。

キャラクターに対する幼児期の認識 —「好き」と「憧れ」の違いに着目して—

澤井 萌佳

本研究の目的は、幼児期の子どもがキャラクターに対してどのような認識を持っているのかを調査し、今後の保育にどのように活かしていけばよいのかを明らかにすることである。学生に回想法を用いてアンケートを行い、子どもがキャラクターに対して「好き」という気持ちから「憧れ」に変わるにはどのような条件が必要か、キャラクターを通してどのような子ども同士の関わりがあったのか、空想の存在をどこまで信じていたのかなどを調査した。それらの回答からキャラクター（空想の存在）とともに保育をしていくには、保育者としてどう援助すべきことがあ

るのか、また、子どものキャラクター(空想の存在)に対しての「憧れ」の気持ちにどう寄り添うべきなのかを明らかにした。その際、キャラクターをただ好きだという場合とキャラクターそのものになりたい場合があることに着目し、キャラクターを通してなりきり遊びなどをする際には、衣装や小道具がすぐに作れるような環境構成を考えたり、子どものキャラクターに対しての「憧れ」の気持ちをしっかり受け止めたりし、子どもが目一杯「自己表現」のできる場を保育者として作ることが大切であることが明らかとなった。

健康

青少年のデジタル機器使用が視力へ与える影響

小川 大貴

本レポートでは、デジタル機器、特にスマートフォンの長時間利用が青少年の視力に与える影響について検討した。現代社会ではスマートフォンが生活に欠かせないものとなっており、ブルーライトの影響や近距離作業による視力低下、眼精疲労が問題視されている。特に青少年において、視力1.0未満の割合が年々増加しており、スマートフォン利用の増加と関連があると考えられる。デジタル機器利用による視力低下を防ぐためには、利用時間の制限や、遠くを見る習慣を身につけることが有効である。また、適切な瞬きを促し、涙液量を増やす工夫も視力を守るために重要である。具体的には、スクリーンタイム機能や保護者の設定による利用管理、20分近くを見たら20秒遠くを見るよう意識することなどが提案されている。さらに、地域や学校、家庭が連携してデジタル機器利用の課題に取り組む必要がある。香川県では「ネット・ゲーム依存対策条例」を施行し、使用時間を制限する取り組みが進められている。一方で、他国では16歳未満のSNS利用を禁止する法案も可決されており、規制の在り方についても議論が求められている。今後、デジタル機器とどう向き合うべきかを考える必要がある。規制だけではなく、デジタル機器を適切に利用できるスキルを育成することが、青少年の健全な成長を支える鍵になるといえる。

子どもの性加害及び性被害を防ぐために保護者と学校がすべきこと ―今求められる性教育とは―

吉満 璃音

近年、性教育が「タブー視」されることが、教育現場や家庭での性教育の実施を妨げている。この影響により、人の気持ちや尊厳について学ぶ機会が失われ、性被害や性加害につながる可能性が指摘されている。そこで本研究では、子どもに対する性加害及び性被害を防ぐために、学校と保護者が担うべき役割と性教育の理想的なあり方を明らかにすることを目的とする。調査は東京都内の公立小学校1年生から6年生の保護者計88名と、同じく東京都内の公立小学校の先生方計18名を対象に行った。主な調査内容には、性加害・性被害を防ぐための教育に対する意識や困難さ、具体的な対応策、性別や年齢、家庭環境が性教育への関与や態度にどのような影響を与えるかを検討した。結果、保護者と先生の双方が性教育の必要性を認識しているものの、羞恥心や不安感が実施を阻害する要因となっていることが明らかになった。また、日常的な親子の会話が性教育の実施に大きく関与していることが示された。さらに、性被害が発生した際の対応について、保護者は被害者のケアや加害行為への厳格な対応を求める一方で、教員は具体的な支援や教材の提供を必要としていることがわかった。これらの結果を踏まえ、性教育の効果を高めるためには、学校と家庭が連携し、包括的な性教育を推進するとともに、専門職による支援体制の整備が必要であることが示唆された。

小学校における飲酒防止教育の現状と課題

長谷川 晴紀

本研究は、小学校における飲酒防止教育の現状を教員の視点から明らかにし、課題や改善策を検討することを目的とする。未成年飲酒は体に悪影響を及ぼすリスクが高く、小学校教育においてその未然防止が求められている。

本研究では、練馬区内の公立小学校教員36名を対象に、飲酒防止教育に関する経験や認識、現状の課題についてアンケート調査を実施した。その結果、93%の教員が飲酒防止教育を効果的と評価する一方で、「時間不足」や「教材不足」が主な課題として挙げられた。また、教科横断的な教育はほとんど行われておらず、教員の飲酒防止教育の認識にもばらつきがあった。本研究は、教育内容の質の向上や専門的サポートの重要性を指摘し、特に早期教育や教員の研修機会の拡充を提案している。さらに、4～5年生への教育拡大や、外部講師の活用が効果的な改善策として挙げられる。本研究の成果は、教員の負担を軽減しつつ、飲酒防止教育の質の向上と児童の健全な成長を支える一助となることを目指している。

先生と児童の意見から座席配置を考える

朝倉 梨奈

児童は多くの時間を教室で過ごす。そのため、教室内の座席配置は児童の学習意欲や人間関係に大きな影響を与える可能性があると考えられる。そこで本研究では、小学3年から6年の児童(609名)とその担任の先生(23名)を対象に、教室内の座席配置について、児童側と先生側の両方の意見を明らかにすること、児童の座席選好を明らかにすることを目的とした。本研究では、3年生は2つの席が隣同士のペア型、6年生は各席が単独で配置される独立型を好む傾向が明らかになった。そのため、教室内の座席配置は、学年や発達段階を考慮する必要があると言える。また、好きな教科が「ない」と回答した児童は後方、逆に嫌いな教科が「ない」と回答した児童は前方を好むことも明らかになった。さらに、先生の回答から、3年生ではペア型、6年生では独立型を採用する割合が多いことがわかり、3年生はペア型、6年生は独立型を好む傾向にあるという児童の結果との関連が確認できた。したがって、先生と児童の意見に大きな差がないことが示された。先生が児童の座席に関する意見を把握しておくことは、よりよい学習環境の提供につながるだろう。

月経教育の改善に向けた男女間の知識差の分析

青井 佳菜

近年、月経教育が実施されているものの、生理休暇の取得率の低さなど、男女間における月経の知識不足が原因となる社会問題が指摘されている。そこで、本研究では望ましい月経教育の改善を目的に、20代前後の男女284名を対象にアンケートと知識テストを実施し、その知識差の分析を行った。その結果、女性は男性に比べて月経に関する知識量が高いが、男性はナプキンの使用について、女性は月経の平均期間についての知識が不足していることが明らかとなった。加えて、アンケートの分析の結果、回答者が月経について知った時期や望む月経教育の開始時期は男女間でずれがあり、女性の方が男性に比べどちらも早期である傾向が見られた。また、月経教育の内容として、月経が起こる仕組みや身体症状が多く挙げられた。以上の結果より、月経教育の学習開始時期は、女性は男性よりも早期に学習を始めることが望ましいと考えられる。また、内容として月経が起こる仕組みや身体症状、そしてナプキンの使用方法や月経の平均期間についても学習を行うことで、効果的に月経に関する知識を得ることができ、男女間で平等に月経に関する知識を共有する社会を形成することが出来ると考えられる。

自己理解の深化にむけた小学生と先生の立場からみたキャリア教育

村上 娑耶香

本研究では、キャリア教育における子どもと教師の視点から現状と課題を分析し、子どもの夢の有無と将来への期待や学習意識、学習項目、資質・能力との関連を明らかにした。夢を持っている子どもは将来に対する期待感や学習に対する意識が高く、学習活動における資質・能力の面でも積極的に関連していることが示された。特に、夢を持つことが将来の目標設定や自己理解を深める一助となり、学びへの意欲を高める結果に繋がることが明らかになった。一方、夢を持たない子どもは学習と将来の繋がりを感じにくく、学びに対する意欲が低いことや、自己理解が不足している可能性があり、キャリア教育を通して、多様な職業観や自己理解を促す必要性があると推測される。また、教師の働きかけは子どもの自己理解や夢や目標に影響し、興味や得意分野を将来と結びつけ、多様な職

業観や柔軟な適応力を育くむ支援が重要であると考えられる。一方で、人材や教材の不足、キャリア・パスポート運用に伴う負担が課題であり、支援体制の整備が必要であると考えられる。これらの課題を克服し、体験型学習の充実や学習内容の改善を図ることで、自己理解を促し多様なキャリア観に基づいた、キャリア教育の質が向上することに繋がると示唆される。

社会的適応性の低下を誘発する生活習慣と属性 —コンピューターゲーム依存傾向に着目して—

白石 拓馬

近年のデジタル技術の発展とともに、コンピューターゲームが若者の生活に深く浸透し、過剰なゲーム依存が社会的適応性に影響を及ぼすリスクが指摘されている。そこで本研究では、「社会的適応性」と「コンピューターゲーム依存傾向」に着目し、男性89名、女性91名、計180名の若者(18歳以上30歳未満)を対象に、社会的適応性尺度とゲーム依存度尺度を用いて調査を行った。社会的適応性とゲーム依存傾向の関係に加えて、生活習慣および属性と、日常的な悩みやストレスにおける関係性を検討した。本研究では、社会的適応性とゲーム依存度との間に有意な関連性が認められた。また、生活習慣や属性、日常的な悩みストレスについて関連を検討した結果、社会的適応性においては、食生活への意識や外出の頻度に加え、日常的な悩みやストレスとの間に有意な関連性が認められた。ゲーム依存度においては、外出の頻度や性別において有意な関連性が認められた。以上の結果より、社会的適応性の低下が生活習慣の乱れや心理的負担の増加を通じてゲーム依存傾向に結び付くのではないかと結論付けられた。

視覚と嗅覚を介したストレス緩和法の検討

—VRによる自然映像鑑賞効果と檜の薫香効果との交互作用—

佐伯 晃

本研究は、現代社会における職場のストレス問題に対処するため、視覚と嗅覚を活用したリラクゼーション手法を提案し、その効果を検証するものである。特に、VR技術を用いた自然映像の鑑賞と、薫香の香りを組み合わせた方法が、ストレス軽減にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とした。健康な大学生15名を対象に、コールドプレステストを用いてストレスを誘発した後、4つの異なる条件下でリラクゼーション効果を測定した。その結果、嗅覚および視覚を刺激する方法がストレス緩和に有効であることが科学的評価から示された。しかし、本研究の目的でもある「嗅覚刺激が視覚によるリラクゼーション効果に相乗的な影響をもたらす可能性」を明らかにすることができなかった。一方で、VRゴーグルの装着に伴う不快感や、香りの好みによる個人差がストレス緩和効果に影響を与える可能性があることも明らかになった。以上の結果から、視覚と嗅覚を活用したリラクゼーション法にはストレス緩和の可能性があることが示されたが、実用化に向けてはさらなる改良と検証が求められる。

若者の抑うつ状態の原因を探る —抑うつ状態経験者3人へのインタビューから—

友田 優世

本研究では、若者の抑うつ状態に至る要因と心理状態を明らかにすることを目的とした。先行研究を踏まえ、学業、人間関係、家庭環境などが抑うつ状態に影響を与えるとされており、本研究では半構造化インタビュー調査を通じて、実際に過去に抑うつ状態にあった学生の心理状態や背景に焦点を当てた。結果として、抑うつ状態にあった学生は、環境の変化や人間関係のトラブル、家庭内での問題を抱えていることが分かった。特に、環境の変化と人間関係のストレスが積み重なり、抑うつ状態を引き起こすリスクが高まることが示唆された。反対に、抑うつ状態を乗り越えられた要因として、友人や家族の支援が乗り越える手立てになっていることが分かった。抑うつ状態の心理状態として、目の前のことにしか考えることが出来ず、正常な判断が出来ないことも明らかになった。今後の課題として、早期の介入や支援が重要であり、学校や家庭での環境改善が必要であると考えられる。また、人間関係が善悪双方の一面を持つことから、どのような人間関係がどのような影響を与えるのかについてより詳しく調べる必要がある。